



城

第五十五回

ぶしゅうまつやま
武州松山城

～関東の覇権をかけた争奪戦～

山本 忠博

現在の埼玉県の吉見町の西の端で、東松山市との境界線の周辺に在ったのが、松山城です。城の主要部は吉見町に在りますが、城下町は東松山市側に在ったようです。昔の城において松は、松明、風除け、建築資材等々、非常に重宝された木で、これを多く植えたが故に、或いは、この木の四季を通じた美しさにあやかっただけで松山城と呼ばれた城は多くありました。備中の松山城、伊予の松山城、庄内の松山城等々です。これらの城と区別するために、吉見町の松山城は、武蔵の国の松山城、すなわち武州（or武蔵）松山城と呼びならわされています。

戦国時代において、この城は激しい争奪戦の対象になりましたが、その争奪戦の経緯を見ると関東の新旧勢力の入れ替わりや新興勢力の対立関係がよく見えてきます。

筆者はひねくれ者なので、現代でもはやされる名将と呼ばれる人物が負ける場面は大好きなのですが、今回負け側に回るのは上杉謙信ですので、悪しからず。ちなみに、上杉謙信の生涯での勝率って、そんなに高くないのですよ。負けな戦をしていたとも言えるのですが、大敵の息の根を断つような大勝利もないのですよね。あっ！話が逸れました。上杉謙信ファンは、笑って許して下さい。

武州松山城の概略

武州松山城の築城にまつわる伝説は多いのですが、とりあえず歴史的な資料で確認が取れるのは1300年代末から1400年代初めで、この頃には上田氏の城として在ったとされます。

市野川が城の北側から西を回り込んで南側に流れており、この川が断崖を伴って天然の堀を形成していました。比企丘陵の西端で市野川が蛇行する舌状台地上の丘が本城に当たります。平山城或いは丘城と呼ばれる形態の城です。周囲には市野川が形成した低湿地帯が広がって天然の要害となっており、その堅固さから不落城とも呼ばれました。

ここで、松山城を巡る情勢の概略を予め簡単にまとめておきましょう。松山城を築城したとされる上田氏は、戦国前期においては扇谷上杉氏の家臣でした。この時点における松山城は、関東の北に勢力を張った上杉宗家の山内上杉氏と関東の東に本拠を置いた古河公方とに対する前線基地でした。

その後、伊豆から進撃を開始した新興勢力の後北条氏が、これらの旧勢力を関東から駆逐すると、越後の長尾景虎（後

の上杉謙信、以降、上杉謙信で統一）が上杉の名跡を継いで、関東への介入を始めました。これに、甲斐の武田信玄が絡んで、松山城の争奪戦が繰り広げられることとなります。

戦国前半期の松山城

第31回の石神井城で、戦国前半期における関東の争乱を書きました。詳しくはそちらをご覧くださいとして、ここでは、簡単に松山城の周囲の戦国前半期の諸勢力の関係を見ておきましょう。

現在の茨城県古河市に本拠を置いていたのが古河公方です。もともとは鎌倉に在って鎌倉（or関東）公方と呼ばれ、室町幕府の東国支配の任を負っていました。しかし、代を重ねるごとに室町將軍家と対立するようになり、遂には幕府の命を受けた家臣の山内上杉氏と戦って古河に逃れることになりました（1455年）。その後も一定の勢力を保って、山内上杉方と戦うこととなります。

鎌倉公方を補佐する関東管領の任にあったのが山内上杉氏です。関東の北部に勢力の中心を置き、庶家に当たる関東南部の扇谷上杉氏と協力して、かつての上司であった古河公方と戦っていました。しかし、そのうちに扇谷上杉氏とも対立するようになります。

扇谷上杉氏は本拠を川越城に置いていました。松山城の上田氏は、その属将です。扇谷上杉氏が本拠の山内上杉氏と対立するようになってからは、松山城は北の山内上杉氏と東の古河公方への抑えの城として機能していました。

後北条氏の武蔵国北上と松山城風流合戦

扇谷上杉氏と、山内上杉氏と、古河公方の旧勢力が関東で争っているうちに、南の伊豆から相模を経て、新興の後北条氏が武蔵国（現在の埼玉、東京、神奈川の一部）に侵攻してきました。

後北条氏が1537年に扇谷上杉氏の居城である川越城を攻撃してこれを奪取したため、扇谷上杉氏は松山城に移りました。後北条勢は勢いに乗って松山城も攻撃することになります。この城攻めは、松山城風流合戦と呼ばれます。迎撃戦を展開する守城側の武將と、攻城側の武將との間で、風流にも和歌のよみ合いがあったというのです。

大略は次のような感じです。攻城側「好機とみて撃って

出たのだろ。なんで引き返す？」守城側「俺が誘いに乗って、主君を残して死んだら、お前たちがこの城をのみ込んでしまおうだろ。(そんなことはさせないよ。)」意識してしまうと味も素っ気もないのですが、元歌にかけて、即興でよんだわけです。戦国期とはいえ、まだ風流を解する心があったことを示す逸話です。この戦いで守城側は持ちこたえ、後北条氏の攻撃を跳ね返すことに成功しています。

その後、松山城は、扇谷上杉氏の居城となったため、両氏の威信をかけた改修工事が行われたものと推測されます。

旧勢力の関東からの退場

扇谷上杉氏の居城であった川越城を奪われるに至って、旧勢力三氏は後北条氏の脅威を痛感し、和議を結んで連携して後北条氏に対することになります。ここでは、松山城は、対後北条氏の前線基地になりました。三氏は、巻き返しを図って、1545年に川越城奪還のための総勢8万と称する連合軍を起こしました。

この時の北条氏康の置かれた状況は、絶体絶命の状態でした。山内上杉氏と連携して駿河の今川義元が後北条氏を西から攻めていたのです。これに甲斐の武田信玄までも同調し、後北条氏は川越城の救援になど向かえない状況でした。

それでも、北条氏康は、川越城の3千の兵が半年間持ちこたえている間に、今川氏との和議を成立させ、1546年に川越城に救援の兵を向けました。しかし救援兵力は8千で、連合軍側とは明らかな兵力差がありました。そこで氏康は三氏連合に対して和議を懇願し続ける態度を示し、それで連合軍の油断を誘います。そのうえで、氏康は連合軍に対して夜襲を敢行し、川越城からも城兵が撃って出て、連合軍を崩壊させました。

この戦いによって、扇谷上杉氏は滅亡し、古河公方は後北条氏の傀儡となり、山内上杉氏も急速に衰退しました。この戦いの直後に、松山城は後北条軍の手に落ちていきます。この時点で、松山城は、対山内上杉氏の最前線になりましたが、山内上杉氏は、後に越後の上杉謙信の下に逃げ落ちることになります。

松山城の争奪戦

関東を追い出された山内上杉氏は、越後の上杉謙信を頼り、上杉の名跡と関東管領の職を譲ることにします。謙信は1561年に関東管領就任のために鎌倉を目指して関東に出陣しました。北条氏康は、松山城に一度は陣を敷きますが、その後には作戦を変更し、本拠の小田原城まで引きます。結果として松山城は謙信に奪取されます。奪取後の城主として、謙信は扇谷上杉氏の一族を充てています。

謙信が、長陣に飽きた諸將の戦線離脱や甲斐の武田信玄の動きに対応して、いったん兵を越後に引き上げたのを見

計らって、北条氏康は反撃に転じ、1561年の内に松山城の奪還に向かいました。これを阻止すべく、謙信も松山城救援に再出撃しますが、氏康はこれを生野山で迎撃し撃退しています。ただし、氏康による松山城攻略もなりません。この戦いは、謙信と信玄の第四次川中島合戦直後に行われているため、謙信としては、この年にかなり消耗させられたこととなります。

松山城を巡る次の大規模な戦闘は、1562年に起こります。北条氏康が松山城奪還の兵を挙げ、後北条氏と同盟を結んでいた武田信玄もこれに参戦したのです。この攻城戦で、信玄は金堀衆を呼んで坑道作戦を取ったといわれます。城のすぐ近くに吉見百穴と呼ばれる古墳時代の横穴墓があるため、信玄はこれを見て坑道作戦を思い付いたなどという話もあります。

北条と武田の連合軍は、城を囲んだまま年を越しました。城方の守りも堅かったようです。この間に謙信は救援の兵を挙げて松山城近くに布陣しますが、ちょうどその頃に城方は抵抗を諦めて、連合軍側に開城してしまいました。これに激怒した謙信は、城将とした扇谷上杉氏の人質を、直ちに処刑したといえます。

その後の松山城

後北条氏は謙信との争奪戦を制して、ようやく松山城を手中に収めました。後に、長年敵対同士だった後北条氏と謙信が同盟を結ぶ際にも、松山城の帰属は問題となります。結局、後北条氏側の家臣となっていた上田氏の城と認められます。

その後、豊臣秀吉の北条征伐の際に、松山城は豊臣方に落とされ、しばらく使われたうえで、江戸時代に入る直前に廃城となっています。

松山城の遺構は、平成20年に、菅谷館跡(嵐山町)、杉山城跡(嵐山町)、小倉城跡(ときがわ町、嵐山町、小川町)とともに、「比企城館跡群」として国の史跡に指定されています。

現在においても、城の中心域の曲輪の遺構が良く残っています。ただし、この遺構は、どうも私有地らしいので、訪れる際は、マナーに気を付けましょう。



松山城の鳥瞰図